



シンガポールに生活して

シンガポール大学 外科 河野 浩二

私は、2011年10月から現在まで、シンガポール国立大学外科に Position を得て、上部消化管外科の臨床と、腫瘍免疫学の研究に従事してきた。医療に関する意識の違い、文化の違い、多民族国家など、日本では経験しないような事案に直面しながらも、臨床（手術）を実践し、自身の研究室（写真1）を運営してきた。まだ2年あまりであるが、私が感じたシンガポール、あるいはシンガポール大学について紹介してみたい。

シンガポールは人口約580万人規模の都市国家で、近年の経済成長により、活気あふれる、Activityの高い国として知られている。2013年の人口1人あたりのGDPは54,775ドルで、日本を超え（37,560ドル）、世界トップクラスである。金融、中継貿易、観光（写真2）などを主な産業とし、驚くほどの治安のよさと、交通、情報インフラの充実により、アジアの各分野のハブとなっており、小国ながら世界にそのプレゼンスを示している。英語が公用語である点と、アジアの地理的な中心である点を生かし、さまざまな

分野で国際的な競争力を発揮しており、2011年の世界経済フォーラムでは、世界第2位の国際競争力を有する国と評価された。大都会がそのまま国になったようなイメージで、田舎者の私としては、都会の喧騒に閉口することもあるが、しかしながら、長期的な都市計画により、豊かな緑と建築物、居住区と自然保護区などの調和が機能しており、Green Cityとも呼ばれている。近年は、医療関連ビジネスをシンガポールの基幹産業とすべく、大規模な予算と人員を投資しており、シンガポール大学医学部もその重要な拠点である（写真3）。

シンガポール大学は、世界100カ国以上から約40,000人の学生を有する総合大学であり、QS World University Ranking（2013年）で、世界23位、アジア1位の大学にランクされている。このランキングの尺度として、研究、教育、企業化の面での質の高さはもちろんであるが、国際化の面も重要視されている。したがって、国際化の面ではシンガポール大学は大変有利であり、日本の有名大学が後塵を拝しているのは、

国際化のポイントの相違とのことである。シンガポール大学医学部の特徴としては、Translational Researchに重点をおき、第I相、第II相臨床試験が実施しやすいような、予算面、人員面でのインフラが整っている。患者数、あるいは人口の関係で、大規模第III相臨床試験を行うには不利だが、企業主導、あるいは医師主導型の第I相、第II相臨床試験を行うには、すばらしい環境といえるのではないか。実際、世界のMega Pharma（巨大製薬企業）の多くは、アジアのHead quarterをシンガポールに置いており、注目度が高いことがよくわかる。

シンガポールを語る上でさらに特徴的なことは政治体制である。現在、国会議員の93%は与党議員で（5年ごとの総選挙で決まる）、首相の強いリーダーシップと長期政権（現Lee Hsien Loong首相はすでに10年以上）が可能となっている。それにより、即決即断が可能であり、同時に中長期計画が立案、実行できるメリットを有している。これは、小国がゆえに、絶えず国際競争を意識し、国内での議論よりも、世界を視野



写真 1



写真 2



写真 3

に入れてすばやく行動するという基本構想によるとのことである。もちろん、独裁政治や汚職の温床となる危険性はあるが、政治家は優秀な人材が配置されており、今のところ、強い政治主導のもと、国は順調に成長を遂げている。現政権の中長期政策のひとつに、医

療分野をシンガポールの基幹産業に成長させる政策がある。この政策のもと、シンガポール大学医学部もその方向性と中長期計画を決定している。すなわち、明確な国家戦略のもと、大学、あるいはシンガポール医療全体が強化されているのである。与野党が拮抗した

日本は、成熟した民主主義ともいえるが、議論や先送りなどで何も決まらない場面や、リーダーの頻繁な交代による政治体制の非継続性があり、無駄の多い政治システムといえるのではないか。

もうひとつのシンガポール社会の特徴は、競争原理と成果主義で

ある。例えば、シンガポール大学医学部と大学病院は、一見、シンガポールで唯一絶対の存在のように思えるが（とくに国際的には）、実は、Singapore General Hospital（大学院大学を併設している）というライバルが存在する。もちろん敵対しているわけではないが、両者は基本的には相いれない好敵手という関係である。すなわち、政府は両者を競争させることで、シンガポール全体の医療レベルを向上させるように仕組んでいるのである。この競争原理は、シンガポール社会の多くの分野で実践されているとのことである。私のような単純な男は、人材とお金を1カ所に集めたほうが、効率がよいような気がするが、さて正解はいかに？

また、成果主義もはっきりしている。例えば、大学病院の医師の待遇（給料）は、同等のポジションであっても、各人ですべて異なっている。基本給はある一定の基準があるようだが、前年のPerformanceが評価（点数化）され、ボーナスや次年度の昇給が決められ、点数に応じてIncentiveが与えられる。例えば、臨床も研究もかなり頑張っている人にはそれなりのIncentiveがあり、一方、ある程度の臨床のみで自分の生活も重要視したい医師は、やや待遇面で劣ることを承知している。このIncentiveが最も明らかなのが外科系臨床医であり、手術件数、症例数により

Incentiveが決まるとのことである。ちなみに、例年、シンガポール大学医学部の卒業生約200名の内、80名程度が外科医を希望し、選抜試験で35名程度のみを採用するという状況であり、外科は人気の高い診療科で、かなりの狭き門となっている。Incentiveがどのように影響しているか不明だが、日本との状況とは好対照である。ちなみに、われわれのような海外スタッフは、年俸制の契約により、上記のIncentiveの対象の範疇ではない。

歴史的に、シンガポールは長期のイギリス植民地支配下であったが、第二次世界大戦で日本に侵略、占領された（1942年2月15日）。昭南島と命名され、日本陸軍によって、数年、統治支配された。終戦後、イギリス植民地支配への復帰、マレーシア連邦への併合の過程を経て、1965年に独立した。したがって、反日感情があっても不思議はないわけだが、私は少なくとも、反日感情を感じたことはない。あるいは、一般的にも反日感情が話題に上ることはない。もちろん、工作上、あるいは表面的には問題なくとも、深層ではどのように感じているのか知る由もないが、中国、韓国のようなあからさまな反日感情はまったくない。聞くとところによると、これは、シンガポール独立後の小中学校の教育政策においては、他国を非難するのではなく、自国民が世

界に伍していくための未来志向にのっとり、競争原理と成果主義をシンガポールの基本とする方針とのことである。

医療に携わる外科医として、シンガポールと日本が対比して見れば、シンガポールのすばらしさ、日本のすばらしさを再認識できる。あらためて、日本の医療は特殊な状況にあることがわかる。最も高度な高齢化社会をむかえ、皆保険制度が機能し、高い医療レベルが維持されている。このような国はほかにはないように思える。何とかこの高いQualityの医療システムを維持し、さらに向上して、世界に誇れる日本の医療をさらに発展させるべきである。個人的な見解として、日本の消化器外科のレベルは、世界トップクラスであるとあらためて認識した。それは、日本の消化器外科は、画像診断、内視鏡診断、内視鏡治療、病理診断、手術手技、患者管理のすべてにおいて高いレベルにあり、総合的な能力が優れているといえる。

以上、思うままにシンガポールで感じることを述べてみた。多国籍、多民族、多言語が行きかうこの国が、将来どのように発展するか、あるいは衰退してしまうのか、極めて興味深い。少なくとも、医療分野がシンガポールの基幹産業となりえるのか否か、10-20年後にはその答えが導かれるだろう。

